

# 初期茶道史に見られる「数寄」の変遷

青山俊董

## 一

茶の湯の精神、あるいは美的理念を表わすのに、「わび」という言葉をもってすることは、周知のことである。しかし茶の歴史の上でいちばんたいせつな時期、すなわち茶が生まれ、育ち、完成したという、珠光、紹鷗、利休、そして利休直後までの茶の湯関係の書物を見てゆくと、この意味の「わび」は全くといってよいほどに見いだされず、そこに用いられている「わび」は、そのほとんどが貧困・孤独の意味を多小にかかわらず持っているものであり、さらに今日考えられているような「わび」という言葉の持つ内容は、当時「数寄」という言葉で表現されていたということに気づく。

そこでここでは、茶の湯に取り入れられる前の「数寄」はどんな意味を持っていたかを簡単に眺め、それが茶の湯に取り入れられるからどのように変化したかについて、考察を試みることにする。

## 二

「数寄」は好きの意で、『下学集』に「数寄僻愛之義也」とあるように、僻愛、偏愛執着の意味を持つもので、元来は好色の義であったのが、和歌管絃等文雅風流に心を寄せることを意味するようになり、さらにそれが出離解脱の方便となるものと考えられ

るようになった。

数寄の発現は、一般に俊成・定家、あるいは西行・長明にあるとされているものようである。長明が晩年に編んだ『発心集』には己れの好みへのひたすらの執心としての「すき」と同時に、出離解脱の方便としての「すき」の例が、数多く語られている。

長明以後の「数寄」としては、「誠の数寄は連歌なき時も又ひとり酔り」(梵燈庵返答書、下)

「ただ不断の修行をばげまして年月を送りなば、つるに自得発明の期あるべきなり。只数寄にこえたる重宝なし、大事をもゆるし勅撰に入れ侍り、誠の数寄だにあらばなどか発明の期なからん」(正徹物語)

「ただ数寄と道心と閑人とのみ大切の好士なるべく哉」(心敬「老のくりこと」)

「惣て諸道は、習ひと数寄と器用と三也。この三そろへば、いづれの道にも、上手の名を得る也。一闕くれば、中分なり。此三のうちにては、数寄肝要ならん哉。たとひ器用勝れずとも、好く心あれば、習ふ事あり。好きで習はづ、器用なくとも、無下なる事あるまじ。又人の指南をもすること、便りあり。器用なれども、

好かず、習はぬ人は、無下なることある也。」（金春禪鳳『毛端私珍抄』）註<sup>1</sup>

などがある。

茶の湯の方でも「数寄」を同様の意味に用いた場合がある。「紹鷗百首」―註<sup>2</sup>―の中の

「上手にはすくと器用と功積と此三つ揃ふ人能しる」

の歌や、『北野大茶湯之記』の

「一、北野の於森、十月朔日より十日の間天気次第、大茶湯被成御沙汰ニ付而、御名物共不残被相揃、数奇執心之者ニ可被為見御ため、御催被成候事。」

という言葉、また『山上宗二記』の、

「下京宗悟、茶湯スキタル人也云々」

などに用いられている「数寄」は、その例と考えてもよいのではなからうか。これらの「数寄」はいずれもその創作態度や心構えを示すのに用いられている。久松潜一氏<sup>註3</sup>は歌、連歌の道に酔うのが数寄であるとし、唐木順三氏<sup>註4</sup>は、中世初期の「数奇」とはディレクタンティズムであり、外形を極微のところまで圧縮した栄華という概念であり、旅の栄華、草庵の栄華、清貧の栄華、乞食の栄華、遁世者の栄華であるとしておられる。

三

このように「数寄」は元来好きの意で、広く風流韻事に心を寄せることを意味していたのであるが、諸文化の中で歌道がその王位を占めていた関係上、後の松永貞徳が「好きと云ふも歌人の事なり」<sup>註5</sup>といったように、一般に数寄、数奇人といえば、歌、歌人のこ

とを意味していたものようである。茶の湯が新しい風流として流行するようになると、歌ずきに対して茶ずきという言葉が、相對して用いられるようになった。清巖正徹の歌書『正徹物語』には、

「歌の数奇についてあまたあり、茶の数奇にも品々有、先茶のすきといふものは、茶の具足を奇麗にして建盞天目茶筌水さしなどのいろいろの茶の具足をこころのをよぶ程たしなみ持たる人は茶の数奇也。是を歌にていはづ硯文台短冊懷紙などうつくしくたしなみて、何時も一續などよみ会所などしかるべき人は茶数奇のたぐひなり。」

という言葉がのっている。

やがて歌学が衰え、逆に茶の湯に能阿弥、珠光などが出て茶が盛んになるに従い、数寄といえは茶の湯を指すようになった。『二水記』大永六年（一五二六）八月二十三日の条には、

「午時参青蓮院、万里小路、阿野小将、高倉小納言等同道、於池中島有御茶、種々儀尤有興、当時数奇宗珠祇候、下京地下入道也、数奇之上手也、入夜有盃酌、知恩院長老被参了」

とあり、同じく宗珠<sup>註6</sup>のことを、連歌師の柴屋軒宗長は、『宗長手記』の大永六年八月十五日の条で、

「下京茶湯とて、此比数寄などいひて、四疊半敷、六疊鋪各々興行、宗珠さし入門に大なる松あり、杉あり、垣のうち清く、蔦落葉五葉六葉色濃を見て、今朝の夜のあらしを拾ふ初紅葉。」

と語り、いずれも茶の数寄を意味していることは、明らかである。しかもその茶数寄は、正徹のいう茶数寄と非常によく似ていて、どちらかといえば能阿弥流の結構なる茶の湯を意味している。永禄八

年（一五六五）正月二十日の奥書のある『分類草人木』には、

「数寄ト云フ事何レノ道ニモ好ミ嗜ムヲ云ベシ、近代茶ノ湯ノ道ヲ数寄ト云ハ、数ヲ寄スルナレバ茶ノ湯ニハ物数ヲ集ムル也、託タル人モ風炉釜、小板、水指、水翻、蓋置、茶入、茶碗、茶筥、茶杓、茶巾、囲炉、自在、炭斗、火箸、茶入、画、墨跡、葉茶壺、茶臼等ヲ集ムル也、諸芸ノ中ニ茶ノ湯ホド道具ヲ多ク集ムル者無之、」

とあって、数寄とは物数を集むる也と、いかにももっともらしい数寄論がのっている。当時の結構なる茶がしのばれておもしろい。

永禄八年といえは武野紹鴎去つてすでに十年、紹鴎によつて「鹿相なる所に物数寄はあり」と、わび茶の言挙げはされていたのであるが、なお一般の茶の大勢は、唐物を中心とした結構なる数寄にあって、わび数寄はつねにただし書きの世界に押しこまれていたのである。同じく『分類草人木』には、

「当時ノ数寄ハ唐物ハイラヌ様ニ成タリ、浅間敷事也、雖レ然初心又ハ詫タル輩、炭茶サヘ難レ調故ニ唐物無レ之詫数寄モ面白キ風情アルベシ」

「囲炉裏の縁、床ガマチ、黒漆ニ塗事、名物持タル人、或ハ老者、ヨゴレメヲ見セシト也、詫数寄若輩ニ不似合ニ」

とあり、同様に利休以前の古法ノ茶式について述べた書といわれる『数寄道大意』には、

「侘数奇之人ハ、字歟、茶杓カ、炭斗カ、火箸カ、二百三百之物所持シテ吉。」

としるされている。茶の湯の開山と呼ばれた村田珠光所持の小茄子

の茶入れは、当時二千貫から三千七百貫していたのであるから、その一万分の一に当る、侘数寄の持つてよいという二百文三百文の道具は、いかに粗末なものであったか、また侘数寄がいかに例外的守在であったかが伺える。

このように茶の湯に導入されたばかりの数寄は、一方に侘び数寄を認めつつも、なお栄華結構の茶を意味する言葉であった。これが茶の湯それ自身が感覺的にも精神的にも深化することによつて、数寄という言葉自身も、おのずからこれに付随して深化し、初期の数寄の意味とは全く別の意味を加えつつ、変化し、発展してゆくのである。

#### 四

利休時代になると、数寄という言葉の用い方が多様になり、単に茶の代名詞として用いられるのみでなく、茶の湯のあるべき姿や心、さらに茶道具判定の場合の美的価値概念をも含むものとなって来た。

大徳寺の玉仲宗瑿の語録『法用文集』の中の、今井宗薫に関する条項には、

「我朝人、称嗜茶謂数寄、名其人謂数寄者、又謂茶湯者云々」

とあり、興福寺多聞院の僧英俊の『多聞院日記』天正十九年二月廿八日の条には「スキ者ノ宗益(易)今晝腹切了」としるされている。利休自身も「数寄屋の事は、我等才覚可申候。」<sup>一註71</sup>と天正十四年九月十八日、前田利家に書き送っており、『宗湛日記』は、「宗湛所、数奇」「御茶ハ数奇屋也」「此数奇御意ニ入」などの言葉で満たされている。ここでは文字通り、茶の湯のことを数寄、茶人のこと

を数寄者、茶室のことを数寄屋、茶道具のことを数寄道具というように、数寄は茶の代名詞として用いられているのである。

こういうとりとめのない数寄に対し、ちようど清巖正徹が「歌の数寄についてあまたあり、茶の数寄にも品々有」とて、茶数寄をさらに茶数寄、茶のみ、茶くらしいの三段階に分けたように、数寄という言葉がもっと限定された、密度の高い意味を含む言葉として用いられるようになって来た。『山上宗二記』を見ると、巻頭の珠光流茶道の由来を説明した条に続いて、茶人の資格に関する規定とも見らるべき、次のごとき興味ある言葉が載っている。

「目利ニテ茶湯モ上手、数奇の師匠ヲシテ世ヲ渡ルハ、茶湯者ト云。一物モ不持、胸ノ覚悟一、作文一、手柄一、此三箇条ノ調タルヲ佗数寄ト云々。」

唐物所持、目利モ茶湯モ上手、此三箇モ調ヒ、一道ニ志深キハ名人ト云也。

茶湯者ト云ハ、松本、篠、兩人也。

数奇者ト云ハ、善法也。

茶湯者ノ数奇者ハ古今ノ名人ト云。

珠光并引拙、紹鷗也。」

ここで初めの「数奇の師匠ヲシテ世ヲ渡ル」の数奇は、明らかに一般的茶の湯を意味するものである。次の「一物も不持、胸の覚悟一、作分一、手柄一、此三箇条の調タルヲ佗数寄ト云々」では、「一物も不持」が「佗」に相当するから、「数奇者」とは胸の覚悟と作分と手柄と、この三ヶ条の調った人のことを意味することになる。さらに「数奇者ト云ハ善法也。」とて、燗鍋一つで一生の間、

食をも茶をもすませ、珠光から「胸中の綺麗ナル者」とほめられた善法を数寄者の代表としてしていることや、また「畢竟、数寄者ノ覚悟全可用禅也。」と同書に書かれている点などから考えあわせるに、狭義の数寄者とは、一道に志の深い人、心の美しい人、心の働きのある人というような、きわめて精神的な意味を持つものであったらしい。しかもこの狭義の数寄者が、広義の数寄者の中で、もっとも重要な位置を占めていたのである。「茶の具足を綺麗にして建盞天目茶筌水さしなどのいろいろの茶の具足をこころのをよぶ程たしなみ持たる人は茶の数奇也。」といい、「数寄ト云ハ数ヲ寄スルナレバ」などといった頃の数寄の考えからみると、そこには数段の進化発展がみられ、茶の湯そのものが「佗び茶」へと深まってゆく、その傾斜の度合いが、この数寄に対する考えの変化の中にも見出されるのである。

茶道具に対する見方の中にも、同様のことがいえる。同じく『山上宗二記』を見てゆくと、茶道具の善悪を識別するのに、「形サハ能候ヘハ数奇道具也」「小釜モ形、コロ、膚サヘヨケレハ数奇ニ入也」「天下一無双ノ数奇道具也」「惣シテ墨蹟ハ第一祖師、第二ハ語、又ハ様子次第ニ数奇ニ入」「抛頭巾、数奇眼也」「当世ハ数奇ニ不入」「当世数奇ニハ如何」「当世ハ好悪トモ数奇ニハ不用」などと用いられている。利休も釣竿齋あての書状の中で、「すきのかまハまれに候」といっており、古田織部も「宗甫公古織之御尋書」の中で、「数奇の振舞に、余り結構わろきよし」とのべている。ここで数寄に入らずとする道具は、おおかた前の時代までは東山御物として、あるいは名物道具として珍重された結構なるものであり、

数奇道具なりとか、数寄に入るとか、数奇の眼などといわれている道具は、その昔、わび数寄なら所望してよいといったような、わびた粗相なものであることがわかる。ここで数寄という言葉に、きびしい数寄の心の反映としての、深く沈潜した目立たないわびたものへの趣好が、美的価値概念として付与され、茶道具目利きの重要な基準とされてきていることに気づく。

ここで今一つ注意せねばならないことは、このように、かつては例外として述べられていたわび数寄が、この時代になると立派な数寄道具として主位を占めるに至るほどに、わびへの傾斜を示しておりながらも、しかもなお「当世道具也、佗数奇ニ如何」「但、袋棚ハ佗数奇ハ無用也」と、「佗数奇」という言葉を、数寄と區別して用いているということである。このわび数寄はその後、紹鴎の愛した袋棚をも無用として、積極的にわびわびて無一物に至り、やがておのずから青み出ざる肯定への道と、わび数寄という言葉自身が元來持っていた「貧困」の意を払いきれずに持ってゆく消極的道との、二つの道をそれぞれに歩んでゆくことになる。

## 五

まずしさを肯定しつつも、なお文字通りのまずしさの影を払いきれないわび数寄の例を『長闇堂記』に拾ってみることにする。

「佗数奇などは気の付ところを専用とするものなり、佗の手に及ぶものは掃除なり」

「粟因口の道善と云道心者の佗数奇あり、手取なべ只ひとつを持って、常はこなかけみそをして、其なべを前なる川にてあらひ、茶湯をわかし数奇せしものなり。京へ鉢に出るにも、戸をかため

ず、心のたけきものなり。」

「高畑弥宜に、宗次、掃部とて、二人の数奇せしもの有り。宗次と云は、有力にして物たしなみふかく、鶴白鳥にても、奈良中にきれし時も、このものには持居たり。妻子うるさしとてもたず。独住に家居きれいにして、うらに茶屋し、朝夕をも自身用意し結構して、みづから食してかまどの灰をも、風炉の内のごとくにして、微塵を払ひ社参に出し行状なり。又掃部といへるは、実の佗にして、掃除もさのみ右の仕かたにはあらず、しかるを、此ものをば世にきれい弥宜と呼び、宗次事をば手をもつけず。宗次腹立て、綺麗には誰にもまけじきをおもへり。去れども世には心をとりに形をとらず、掃部といふものは、実の佗にして、佗をたのしみ、一銭のたくはへ望むことなきにより、きれいの名をとれり。」などがある。いずれもわび数寄を、単なる数寄よりもありたきものとして肯定しているのであるが、しかもなお「まずしさ」ということと無縁ではなく、その意味では古いわび概念の系統をひくものであり、消極的なものである。

これに対し、積極的にわびわびて、無一物をも突き破り、無碍に至ったわび数寄の系譜は、利休から孫の千宗且に至ってさらに深化し、杉木普齋がこの精神を受け継いだようである。『茶道便蒙鈔』における普齋書き入れの部分や、『普公茶話』をみると、数寄とわび数寄の関係は、「数寄」即「佗び数寄」であって、「佗び数寄」のほかに「数寄」はありえないまでに至っている。その例を『茶道便蒙鈔』の中の朱の書き入れの中に拾うと、

「何ニテモナクテモ不苦、夏ハミナ榮ヨウカマシク、カエツテ数

奇ヘイラヌハタラキナリ、カウノモノ、佗ナトハ湯盛ノ蓋ニ出ス  
更尤ナリ。」

「佗などは菓子出し申さすともくるしからず、」

「結句モノコト、不自由ナルテイタラクヨシ、」

「極寒にても、倍不入茶入とりあつかふ事なる、数奇に入たるお  
もしろき心なるべし」

「風炉の茶湯勿論足袋はくべからず候、いろりの時も佗人などハ  
足をあらひきれいにして、寒中とても足袋はかぬハ数奇へ入たる  
事ニ候。」

「自在ノ事クルシカラス候、サビタルモノ故、若キニモクルシカ  
ラス、円タルモノ故数奇ニ入タルモノ也、」

「自在ノ事尤トリアツカヒ自由タルニヨリ老人ト有之一残珍重ニ  
候、サヒタルモノユヘ、茶湯ニサヤウノワカチナク候、不苦候、  
茶湯ハ如此有タキモノナリ、棚ハ至テハスキヘイラヌモノナリ、」  
とあり、「普公茶話」には、

「唯茶湯ハ佗て心意の気味を宗とすへき更数奇道なるへきか」

「元来隠者のよそほひなれば佗たるを本意とす、是数奇といふ心  
に合へるなるへし」

とある。又この普斎の師の千宗旦には、こんな逸話が残っている。

ある日宗旦は、徳川三代將軍家光の茶の師範に当っている小堀遠  
州のもとへ、華美、軽薄に流れてゆく茶道を歎き、茶の本来の姿を  
こまごまと説いた忠告の手紙を送った。すると遠州から、初めにな  
らった茶に反し、華美に流れ、ぜいたくになることは決して自分の  
本心ではないが、一に上意に依って行へるもので、権力に抗するこ

との出来ない現下の状況では止むを得ないと愚痴って来た。その手  
紙には銀の茶杓が添えられていた。宗旦は即座にその茶杓の筒に「水  
谷(屋)用」としるし、以後一度も茶席には用いなかたという。この  
茶杓註は今も益田家に伝わっているとのことである。宗旦の見  
識のおごそかなる一片が伺われると同時に、わび茶が、まさにある  
べきものとして厳然とそびえていることに気づく。すなわちこの時  
代になると、数寄といえわび数寄を意味し、かつての数寄の王座  
にわび数寄が、まさにあるべきものとして名実ともにその座を占め  
るに至ったのである。

## 六

わび数寄が名実ともに数寄の王座にあって当り前とする時代にな  
って、つまり十七世紀後半になって、「数寄」という言葉自身に対  
する解釈のしかたに、今までとは根本的に違った方法が行われ出し  
た。すなわち従来の数寄は、好きから起ってきびしい求道心とな  
り、ついに道を成ずるに至るといふ経歴を持つものであるが、これ  
を全く否定して、「数寄」は「数奇」であり、数が偶わないこと、  
不足なことを意味し、不足を不足と思わぬ精神であるというよう  
に、きわめて儒教的になってきたということである。同じく「普公  
茶話」には、

「数寄者といふは珍奇物を事とせず、或ハ鹿茶なりとも心の綺  
(奇)麗なるをいひて、実を肝要にして志あるをいふ也、数寄と  
いふ名目ハ心ある事なり、常に数寄と書り、数寄は数奇の誤なり、  
李広伝に李広数奇ニシテ而不レ容ニ於世ト史記に見えたり、然れ  
は数奇ハ貧廉質直にして常世に交らず、その幽栖のさまを象りて

数奇屋といへり、」

とあり、普斎より二十七年ほど後（一六五五）に生まれ、普斎と同じ宝永五年（一七〇八）に没した立花実山の書いた『壺中炬談』の中の「草庵大概」の部にも、

「凡数奇屋すき道具などいふこと、基本を考るに、数奇・好事と同じくとなへて、其心雲泥なり、数奇ハ史記李広（李広）伝に、李広老て数奇、註に、服虔曰、作レ事数不レ偶、また前漢書広伝にも、おなしく出たり、師古註に、命隻不レ偶合——云々、凡数の零余を奇といふ、片かたにして、ものの相備らざる躰なり、誠にこれ茶湯の本体なるべし、人として世に偶せず、俗に伴はず、整たるを好まず、不如意をもて樂とす、これ一奇の道人、数奇者の称とす、家舎としては、松楹・竹椽・曲直・方円あるにまかせて、上下・左右偶するものなし、一奇の家屋、数奇とこれを称す、器物としては新古・軽重・長短・広狭、あるひは欠たるを補ひ、やぶれたるをつつり、兎にも角にも、偶するものなし、一奇の器物、是を数奇道具と称す、其はたらき・差排・配合に及び、奇にして偶せざること挙て計ふべからず、又奇偶一同、奇もまた偶、偶もまた奇、環然端なきをいはば、筆舌を勞するに及はず、好事の字は、風流の物ずきなどして、事をこのむ心なれば、露地草庵の趣に八大にたがへり、世間の数奇者は、ミなものすき者、物数奇屋、物数奇器具になりすまして、これを茶湯とおもへり、哀ひかな、数奇の二字、世塵に埋没して百有余年、」

と、同じ説き方がなされている。  
この『壺中炬談』の中の実山の数奇論は、沢庵宗彭（一五七三—

一六四五）の著とされている『茶禅一味』の中の「数奇の事」の条に、「南坊録露地大概に云」として、そっくりそのまま引用されている。これは不思議なことである。沢庵和尚は実山の生まれるより十年も前に、すでに世を去っている。まだ生まれても来ない人の文章を引用できるはずがない。しかも『壺中炬談』の言葉を『南坊録』とまで誤って。桑田忠親氏はこの『茶禅一味』について『茶道辞典』の中で、宗旦に茶を学んだ沢庵が、茶禅一味の精神を示し伝えたもので、寂庵宗沢の著とするは誤りであると述べておられる。しかし実山の数奇論を引用した「南坊録露地大概に云。云々」の文字のある限り、『茶禅一味』をそのまま沢庵の著とすることはできない。また最初にこれを筆写した寂庵宗沢が沢庵の門人とすると、これの写された正徳五年（一七一五）は、沢庵没（一六四五）後七〇年を経ており、寂庵は相当の高齢に達していたことになる。立花実山はこの年より七年前の宝永五年（一七〇八）に世を去っている。没後七年にしてすでに実山著『壺中炬談』は、南坊宗啓著の『南方録』と混同されてしまっていたのだろうか。もっとも『壺中炬談』の書かれたのは、その奥書によればさらに八年さかのぼる元禄十三年（一七〇〇）の秋ということになってはいるが。これらのことから最も無理のない推定を試みるならば、文字通り茶禅一味の境界を送った沢庵和尚の衣鉢を継いだ弟子か、あるいはそれに近い関係にあった寂庵宗沢が、沢庵の殊した覚え書き風の何かをもとでにして、当時のすぐれた茶に対する見解などを引用しながら適当に加筆して世に出したものが、あるいはまったく寂庵自身の茶禅一味の境界を、尊敬する沢庵の名のもとに書いたものか、いずれかであ

ろうと考えられる。

このように好きに由来する「数寄」を否定し、「すき」とは奇数の意味、不足の意味の「数奇」であり、不足を不足と思わぬ精神であるとする解釈は、江戸初期から中期にかけて、林羅山や山崎闇斎らによる儒学の興隆の影響を受けて、新しく行われ出したものと考える。両者のゆきついたところは大変似ているようであるが、しかもなお一方は道徳にとどまり、人間的豊かさ、美的うるおいというようなものがあまり感じられない。好きに発した「数奇」の中には、人間的哀歓が煮つめられ、無一物の宗教に高められ、そこよりおのずから萌えいずるみずみずしい美のよろこびが見出される。「数

寄」の解釈の正道が、後者であること、改めて論ずるまでもない。

註1 『金春十七部集』所収

- 2 一般には『利休百首』として知られている。
- 3 『日本文学評論史、古代中世篇ならびに詩歌論篇』
- 4 『中世の文学』
- 5 『歌林雑話』
- 6 村田珠光の跡継の村田宗珠のこと。
- 7 羽柴筑州宛（前田利家）の利休自筆書状。
- 8 『茶道全集』巻九、千宗室氏の「宗旦の佗茶」による。

（昭和34年度大学院修了）

### 昭和35年度卒業論文題目一覧

秋田県北部音韻研究	堀江 俊峰	紀貫之論	佐藤 力
東歌の研究	牧野 国暉	芥川竜之介論	真山 彰暢
有島武郎研究	松山 宣全	永井荷風研究	塩野 武次
自然主義文学の理論	村上 博生	赤羽根亮弘	下山 隆志
青森県南部地方の方言について	村木 謙二	池本 康弘	高野 郁英
逢坂越えぬ権中納言	森 洪基	今福 房子	千葉 恵山
良寛の研究	森山 真有	井上 卓爾	中島 真光
西鶴の武家物における義理の世界		大崎 誠	西沢 賢
平家物語の研究	山岸 康弘	岡村 智之	中村 武彦
芭蕉の人間と生涯について	山本 康岳	小野田英昭	野田 晴海
	吉田 満	鎌田 昇	栄 宏道
		清沢 宏彰	世間胸算用について―
		小林 光広	（64頁へ続く）
		北村透谷研究	
		李花集の研究	
		太宰治論	
		西鶴の描いた伊勢風俗	
		芭蕉と彼の俳諧について	
		宮本百合子研究	
		啄木の短歌について	
		王朝文学の特質について	
		大宰治の愛について	
		王朝文学の特質について	
		啄木の短歌について	
		宮本百合子研究	
		芭蕉と彼の俳諧について	
		西鶴の描いた伊勢風俗	
		太宰治論	
		李花集の研究	
		北村透谷研究	